○開催概要

森と自然を活用した
保育・幼児教育を考えるシンポジウム

【日 時】2020年2月15日（土）13：00～17：30　【場 所】近畿中国森林管理局 4F大会議室

プログラム

13：00～13：05　開会 あいさつ

13：05～14：05　【基調講演】

乳幼児期における園庭・地域資源を活かした
自然体験や外遊びのススメ ～全国実態調査より～

園庭研究所 代表　東京大学発達保育実践政策学センター園庭調査研究グループ
石田 佳織

14：05～14：15　休　憩（10分）

14：15～16：20　◆ 事例報告

1 グラウンドだった園庭を、土壌改良・樹木の植栽によって樹林化
鑄物 太朗（関西学院幼稚園 副園長）

2 市街地の公園（津雲公園）を活かした森のようちえん
田畑 祐子（森の子教室 代表）

3 行政や自治会と連携した森のようちえん
岡本 麻友子（森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表）

休　憩（5 分）

4 幼稚園への出前木育（木材利用に関する教育活動）授業
米地 徳行（NPO法人 木育フォーラム 理事長）　正田 智美（大阪市立両国保育所 施設長）

5 庭園に生き物が集う空間づくり専門家の活動
小泉 昭男（京都女子大学 非常勤講師、小泉造園 代表）

6 各園が連携した「森と自然を活用した保育・幼児教育」の推進
長尾 鮎子（関市健康福祉部子ども家庭課）　乾 千穂（関市立田原保育園 園長）

16：20～16：30　休　憩（10分）

16：30～17：20　◆ パネルディスカッション

進行：山崎 春人（NPO法人 日本森林ボランティア協会 理事）

17：20～17：30　閉会 あいさつ

【主催】公益財団法人大阪みどりのトラスト協会
【共催】林野庁近畿中国森林管理局、公益社団法人国土緑化推進機構、森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク
【後援】大阪府、環境省近畿地方環境事務所

○出席者数　103 名（発表者、運営スタッフを含む）

○基調講演

「乳幼児における園庭・地域資源を活用した自然体験や外遊びのススメ　～全国調査より～」
園庭研究所代表　東京大学発達保育実践政策学センター園庭調査研究グループ　石田佳織氏

2016 年から行ってきた約 1700 園近くの園を対象とした全国調査の結果をもとに、園庭と地域活用の実態を分析して見えてきた、戸外での保育を高めていくための 6 つの観点についての説明がありました。途中、「子どもの頃の思い出ワーク」として、参加者同士が「心に残っている外での体験」、「どのような心身の成長や学びにつながったか」、「その時の環境」などを披露しあう時間が 3 分間×2 回設けられました。予期せぬ展開でしたし、世代や育った環境の違いがあるにもかかわらず、会場中が子どもの頃の思い出話で盛り上がりました。石田先生からは、「子どもの環境を考える上で一番大事なことは、私たち大人が子どものころを振り返って、あのときの気持ち・感覚を思い出すことです。自分の経験と合わせて、今の子どもたちの環境はどうなのか、というところを考えていただければと思う。」というお話があり、このワークの意義が理解できました。

日本の園庭は、見た目としてすごいという園は多くないけど、本当に細やかなところまで、先生が「子どもたちにとってどうなのかな」と考えて工夫されていて、私は世界でトップレベルなのではないのかなと思っています。

○事例報告

身近に森林や大規模な緑地がない環境でも、園庭や公園などの自然を活用した自然体験（自然保育）ができないか、また、幼稚園や保育所内で完結するのではなく地域や行政、外部の専門家と連携することが有効ではないかという問題意識のもと、事例報告を行いました。

まず、普通のグラウンドだった園庭を、土壌改良を行いながら約 40 年かけて見事な樹林に変えた「関西学院幼稚園（鑄物太朗氏）」の取り組み、千里ニュータウンという市街地の中の公園を活用し森のようちえんを続けてきた「森の子教室（田畑祐子氏）」の取り組み、行政と連携し地元住民と新たな関係を築きながら里山に近い環境で森のようちえんを実践している「森のようちえんウィズ・ナチュラ（岡本麻友子氏）」の取り組みの紹介がありました。

①グラウンドだった園庭を、土壌改良・樹木の植栽によって樹林化

関西学院幼稚園 副園長　鑄物 太朗氏

園庭にカブトムシの幼虫が見つかって、私も興奮しました。「赤いクワガタがおる」というので見てみたら、非常にめずらしいヒラズゲンセイという虫でした。これはハンミョウという虫。きれいですね。こういう心動かす体験が園庭でできるようになりました。

②市街地の公園（津雲公園）を活かした森のようちえん

森の子教室 代表　田畑 祐子氏

幼児期の小学校に行くまでの３年間は、根っこを張るための耕しの時。飛んで来たどんな種もキャッチできるふかふかの土をつくるのがこの時期。見えないところだが、根に栄養を与えてどんどん伸ばしていく。その土づくりを自分たちでするということが、この時期にはすごく大切だと思っています。

③行政や自治会と連携した森のようちえん

森のようちえんウィズ・ナチュラ 代表　岡本 麻友子氏

子どものいない地域なので危機意識をもっていた地元の方々が、私たちを地域のこれからについて一緒に考える仲間に入れてくださった。まだ半年しかたっていないけど、ずっとそこにいたかのような、親戚のおばちゃん、おじちゃんが増えたような感じで、一緒に活動をしています。

続いて、保育・幼児教育の現場をサポートする専門家の立場から、数々の園庭を自然や植物・生き物に触れて育つ場を創造する「小泉造園（小泉昭男氏）」の取り組み、木材利用に関する教育活動＝木育を行っている「木育フォーラム（米地徳行氏）」関わって大阪産のヒノキ材を使ったテーブルとベンチを作った「両国保育所（正田智美氏）」の取り組みの紹介がありました。

④幼稚園への出前木育（木材利用に関する教育活動）授業

NPO 法人 木育フォーラム 理事長　米地 徳行氏

大阪市立両国保育所 施設長　正田 智美氏

３回シリーズで、１回目は子どもたちと先生、２回目は保護者が加わり、最後の３回目は地域の方も手伝ってくださった。大阪府産材を使ったＤＩＹを通して、地域が盛り上がり、私たちにとっても楽しい思い出となりました。

子どもたちは、大阪に生えていた木が板になって、それをのこぎりで切ったり磨いたり、ボンドや万力を使ってテーブルにしていく中で、材料がモノになっていく過程をすごく楽しんでいました。

⑤庭園に生き物が集う空間づくり専門家の活動

京都女子大学 非常勤講師、小泉造園 代表　小泉 昭男氏

植物を使ってこのような遊びができる、ということを、保育士はある程度知っておかないといけない。でも、それを子どもに指導するのではなく、子どもが自ら発見したときに共感してあげるということが大事。保育士は子どもの前で自慢してはいけません。

事例報告の最後は、森を活用した保育に関心のある公立保育園の保育士 13 名と市職員 1 名が「チーム森」を立ち上げ、研修や先進事例の視察を経て、園内外のフィールドで「子どもたちが自然の中で五感で感じ、自分のやりたいことをできる子に！」を合言葉に保育を実践している岐阜県関市の取り組みの紹介でした。

⑥各園が連携した「森と自然を活用した保育・幼児教育」の推進

長尾 鮎子（関市健康福祉部子ども家庭課）

乾 千穂（関市立田原保育園 園長）

子どもたちは本当に遊びの天才だと思います。子どもたちの発想や思い、自分たちで考え、仲間や自分の力で解決しようとする力はすごいと思います。これからも子どもたちが自然の中で五感を感じ、自分のやりたいことをやりきる子になってくれたらと思います。

○パネルディスカッション（敬称略）

事例報告の後は、**日本森林ボランティア協会 理事　山崎春人氏**の進行で、基調講演・事例発表を行った皆さんによるパネルディスカッションを行いました。

山崎：今日は、とても興味深く話を聞かせていただき、勉強になりました。まず、今日の報告の中で、どこに興味を持ったかお一人ずつお話しいただきたい。

石田：子どもの環境を地域の中でどのように支えていくかということに興味があり、関市の、市としていくつもの園が集まって、すごく大きな力で動いているところに感動した。

鑄物：小泉さんの本から小泉さんを知って、今日初めてお会いできた。2007 年に植えた苗木が育った結果のスライドを見て、すごいと思った。私の園では記録をほとんど残しておらず、過去のアルバムを探して今回の資料を作った。プロセスをちゃんと残していかないといけないなと感じた。

田畑：小泉さんのスライドにあったチョコレートの箱の中に入ったどんぐりを見て、同じことをやって遊んでいるのでとてもうれしくなった。本気で子どもと向き合う、自慢したらあかんぞ、というお言葉があった。本気でぶつかっていくバイタリティをいただいたような気がする。

岡本：今日は、関市のお話を楽しみにしていた。なぜそのようになったのか、すごくききたい。

米地：私は木の実や立っている木のことはわからない。製材して板にしたら何の木かわかるので、切ってから聞いてもらえたらなと思う。今日は立っている木の話が多く、参考になった。

正田：公設ではできないことが多い中で、関市の取り組みは、公のバックアップがある。非常に興味を持って話を聞いた。

小泉：園庭つくるにしても木を植えるにしても、公立の場合は制約がある。関市は、子どもの方を見ながら保育ができる体制をつくっており、他の行政も学んでほしい。

長尾：関市は外に出る保育が多いが、園庭についても、子どもたちが遊ぶのに適した環境にできればと思うので、小泉さんのお話が参考になった。

乾　：関市に興味を持っていただいてありがたい。私たちの背中を押してくれた当時の部長（現、市会議員）の浅野氏が今日ここに来ている。一言お話をお願いしたい。

浅野典之氏：飛び入りで失礼する。当時、市長から、「関市でも森のようちえんをやってみては」という指示があった。公立は 10 園あったが、先生たちは毎年異動があり、それぞれの保育園で特色のある保育をやるのは難しいと考え、やるなら 10 園一緒に関市の特色のある保育として頑張ってみようということになった。市長に、保育士さんが外に出る研修の費用をつけてほしいとお願いしたところ、予算が確保できた。そこから、保育士が外に出て先端の事例を学べることになり、この活動が始まった。私が一番喜んでいるのは、この事業をやることが、保育士さんたちにとって本当の働き方改革につながったということ。この話をしていると、子どものように先生たちの目がキラキラと光っていて、本当に充実した仕事をしているなと感じる。これからもこの活動をしっかり見守っていきたい。

山崎　関市の報告の写真の中に、男性保育士がいたようだが、そのあたりを教えてほしい。

乾　　男性保育士は 10 園で 6 人いるが、各園にいるわけではなく、2 人いたり、全然いなかったりしている。

山崎　役割分担はあるのか。

乾　　あまりない。ワイルドに木を切ったり、のこぎりを使ったりするダイナミックな遊びを、子どもと一緒に見本となりながらやれるのが、男性保育士のいいところだと思う。

鑄物　うちは男性が多くて、現在 6 人いる。土嚢袋をみんなでつくって運ぶような作業を、女性・男性関係なく取り組んでいる。

山崎　私自身の課題として、もう少し男性を保育の世界に入れたい、いろんな人間が保育の世界に関わるべきという気持ちがあってお聞きした。

学校や園の中で、安全管理と安全教育の境目がよくわからなくなっていて、どうしても管理に走ってしまうという部分があり、小泉さんの報告の中にも、子どもたちに目が向いていないのではというお話があった。

小泉　カラスが校庭に巣を作った時に、校長・教頭から駆除してくれと言われ、「何で？」ときくと、「雛を守るためにつつくかもしれない」と返ってきた。雛も落ちてないし「そこで子育てしているから近づかんときや」と言っておけば済む話で、命がそこで生まれようとしているのに、否定的なことを言う。学校は保守的になっていて、子どもの安全という話をするが、少し子どもにリスクを持たさないといけない。部分的にカバーしているようでは、心やいろんなものが育たないと思う。木に登ると落ちることがある。手助けすると落ちる。自分で登ろうとしたときには、「自分でできるかな、大丈夫かな」と考えながら、リスクを自分で抱えながら登るので、落ちない。そういうことを積み重ねていかないといけない。

山崎　体育をやるときも、低い平均台を作るとみんな落ちる。ちょっと高くすると、落ちない。慎重になるし、集中しないと渡れないからだ。今のお話からそんなことを思い出した。

天理市と提携を結んでおられるウィズ・ナチュラの岡本さんにその中身をもう少し話してほしい。

岡本　私たちが移転先を探していた時に、天理市どうですかと声をかけてもらった。天理は都会だと思っていたが、市長も住んでいる「山場」は、いい自然が残っていて、地域の人がすごく温かく、移転することに決めた。「山場」は子どもを育てる環境としてすごくいいが、子どもが少なく、学校が統廃合されて、市はこれからこの地域をどうしていくのかという課題を持っていた。そこに森のようちえんが転がり込んできて、私も移住した。今 9 組の家族が、移住したいと空き家待ちをしている。若い世代が引っ越してくるかもしれないという可能性が出てきて、一緒に地域の未来を考えよう、保育から中学校までの新しい教育モデルをつくろうということで、連携協定につながった。

山崎　森の子教室（吹田市）は、公園を自由に使えている状況がすごいと思ったが、経緯があればお話しいただきたい。

田畑　私たちの場合、小さな都会の中の自然をどうやって生かしていくか、というところが勝負になっている。自分の能力を高めていかないと、なかなか小さな自然の中で生きていくということはできない。放置されたビワの木に実がなっていたら、「この木の所有者、誰かいませんか」と近所の人にきいて、いなかったらそれをいただくが、20 人の子どもたちが５つ６つを小さく切って食べる。本当にわずかだが、その小さなことが喜びになっていく。

津雲公園の使用を最初に役所に相談しに行ったとき、こういう形で公園を使いたいが、トイレや水道など、どのあたりまで使えるのだろうかという話をした。役所の場合は担当者の感覚で対応が変わるが、その時にはすごく協力的で興味を持っていただいた。緑化サポーターという公園の掃除等をするところに登録したらというようなアイデアもいただいたが、すでに毎日トイレの掃除やごみ片づけなどを、人知れず地道にやっていた。こういうことを積み重ねて行政にも信頼していただくようにした。

地震や台風で被害が出たとき、行政は町中の倒れた倒木の処理にてんやわんやで、公園まで

手が回らず、放置されるという状況だった。津雲公園でも 30 何本の木が根こそぎ倒れ、森の様子が大きくかわった。これが本当の自然であれば森の再生につながるが、公園なので整備をしていかないといけない。周りの公園の整備がなかなか進まない中で、ＯＢも駆けつけて私たちのメンバーが動き出し、森を整備して木を運んでということをやっておきますねと行政に話をして整備を進めたようなこともある。

山崎　事前に集めた質問の中に、「子どもを遊ばせる公園で木に興味があり、自分でも調べている。この研修では、公園に植えている木や木の実から子ども用のおもちゃの作り方を知りたい。」とあったが、米地さんどうか。

米地　もちろん公園の木でも何の木でも使える。台風で倒れた木を使って、木の玉をつくって木の玉プールにすることもできる。木を切ったらすぐ使えると思っている人が多いが、実はそうではなくて、製材して板にして半年ぐらい干さないと使えない。逆に、干せば使えるわけで、そういう使い方も発信していければと思う。

山崎　木を通して学ぶことはたくさんある。私の家は杉板で、温かいので冬でもずっと裸足で過ごせるが、柔らかいのですごく傷がつく。子どもに、ヒノキの椅子とスギの椅子を並べてどっちがいい？ときいたら、杉のほうがいいと言う。おしりに柔らかいという感覚が子どもにはわかる。

今日のお話の中で感じたが、子ども中心に教育していくというのは、「子どもの育つ力をどう信じていく」ということではないか。みなさんは、どうして信じられるのか。

石田　私は遊びまくっていたし、したいように生きてきて、それで今があって、今それなりに満足しているので、どの子も何かにぶつかって乗り越え、自分の思いを持って生きていくという力があるのだろうなと思っている。

鑄物　今日「子どもの頃の思い出ワーク」をやった時、思いついたのは不快な体験ばかりだった。テントウムシから黄色い汁がいっぱい出て気持ち悪かったとか、落ちたら死ぬような崖を登って遊んだこととか、リスクを感じながら育ってきたということに、気づかされた。ここはあえてフェンスをつくらないで遊具をつくろうといったようなリスクマネジメントをして、ぎりぎりのところを狙ってつくっている。そういうところはこだわってやっている。

田畑　私はそんなにきれいごとで子どもを信じられるとは言えません。ただ、子どもたちと信じあっていける、その過程が面白いと思っている。本当に腹が立ったり、憎たらしかったりという子もいっぱいいるが、その子らとつながるところがどこかにあると思うから、つながった時はすごい大きな喜びになる。子どもたちと向き合うときに、信頼できるところをお互いに探しあう、これが私のやっている森の子の時間だと思う。

岡本　子どもの生きる力と大人の生きる力を考えたときに、子どもたちのほうが生きていく力があると感じている。大人が生きる力をつけられなかったから、子どもに何をさせるのも怖いとか、危ないとかいうのが出てしまうのではないか。信じるというよりは、自分を信じられるかどうかというところを子どもを通して学んでいる、体験しているという感じがしている。

正田　幼児保育と乳幼児保育という職業に携わっているが、子どもを大人のミニチュア版ではなくて、この子はこの子であるという感覚で接している。生まれながらにして「何か私にはないものを絶対持っている」という思いで子どもと関わっている。気づかされることもいっぱいある。ただ、子どもなので大人のようにいろんなことがわかっていないので、保育所では泣

きたいように泣いて、怒りたいように怒っている。そうやって、人になっていく姿を見ていくのがすごく楽しみである。

小泉　自然は多様。自然の多様性と子どもの多様性、そこの部分は信じられる。自然の多様性についていけるのは、子どもが多様だから。残念ながら大人は画一的にものを見てしまうので、一つモノを見てしまったら、その方向でしか見られないが、子どもはいろんな方向からその自然物を見ることができる。そこで、子ども信じたいなと思う。そこを、大人の概念で決め切ってしまうと、閉じ込められた子どもになってしまうので、小さな自然でよいので、子どもを自然の中に放置して、そういう小さな自然の中での子どもの気づきの部分と共感していきながら子育てしていく、子どもを信じていくことが大事だと思う。

乾　0 歳児から 5 歳児まですべてそうだが、子どもが何かをするときには必ず何か意味がある。何かに興味を持って何かをしている。それは何なのかということを、私たちがくみ取って受け止めていくことで共有できるとか、「今これしたかったよね、そうだよね」というところが保育の原点ではないか。そうやって寄り添うことで、お互いが信じられる。私たちはそういうことを大切に保育をしている。

山崎　森のようちえんが注目され、このシンポジウムが定員オーバーになっているのは、今の教育のあり方に対する批判の面があるのではないかと感じている。今までの教える教育から、学ぶ教育への転換期が来ているのかもしれない。アクティブラーニングもそうだが、潮目が変わってきているのではないか。「見守る」という言葉がいっぱい出てきた。今までは、幼児教育でも教えないといけないというところがあったが、子どもというのは自分で育つ力を持っているから信じられる。こちらから押し付けていかなくても、子ども自身がちゃんと持っているから、それを信頼していたら、何とかなるのではないかという感覚を、皆さんが持っておられるような気がした。

石田　素晴らしい取り組みされているところは、リーダーがガッと動いたところがある。今日、リーダーの立場にある方がいたら、自身の場所に戻って、今日感じたことで、ほかの先生方、保護者の方の背中を押していただきたいと思う。子どもの頃の思い出ワークで、皆さんいろいろ感じたと思うが、子どもにとっての環境とどのような関わりをしていったらいいのか、お一人お一人の中に答えがあると思う。それを普段の忙しさの中で忘れている。大人だから忘れている。それをもう一回振り返っていただいて、ぜひ、できるところから一歩踏み出していただきたい。今日ご登壇された皆さんの素晴らしい取り組みは、やはり自分から動かれている。今日、こんなこと学んだよ、こんなことしたよねと発信する。そして子どもの様子も、今日こんな行事しましただけではなくて、ここで子どもが何を感じてどんなことをしたということを保護者の方や地域の方に伝えていただけたらと思う。

山崎　ありがとうございます。

－以上－